

## LD 等支援の必要な子どもの指導の充実に向けて —自分らしさを発揮し、ともに学ぶ喜びを実感できる 個別の指導計画を効果的に活用した教科学習の実際—

久保田 昌子

個別の指導計画は、子どもを正しく理解し、将来を見据えた長期的な目標に基づいた指導・支援を計画的に進めることができるよう、有効なものにすることが求められている。このことから、支援の必要な子どもの指導の充実に向けて、個別の指導計画を授業や生活場面で積極的に活用し、個別の関わりで伸ばす力と集団の中で育てる力を明確にした指導・支援を行うことが大切であると考えた。そこで、集団の中でのつながりを重視した授業づくりの在り方を探り、支援の必要な子どもがよさを発揮し、主体的に学ぶことができる、個別の指導計画の効果的な活用方法を提案した。また、友だちと学ぶことを通して、自己を肯定する力や友だちとよりよい関係を築く力を育む授業実践例を提示した。

### 第1章 支援の必要な子どもが輝く教育を実践するために

#### 第1節 ともに学ぶことの大切さ

LD 等支援の必要な子どもへの指導・支援の考え方は、次の二つの視点が重要である。

- ・ 困難だと考えがちなことも、できる環境を整えることで困難ではなくなる可能性があること
- ・ 社会において、自分の力を発揮し、自分らしく生きることができるようにするという長期的な視野をもつこと

LD 等支援の必要な子どもは、個に応じた指導・支援により、できることが増え、それが、子どもの中の自信として蓄積される。そのための大切な過程として、周りの人から認められたり、喜びを共有したりする体験が重要となる。LD 等支援の必要な子どもは、人との関わりの中で成長するのである。このことから、学級の子どもたちとともに学ぶことの意義は大きいと考える。

#### 第2節 つくるだけに終わらない個別の指導計画

個別の指導計画は、実態を把握することにとどまらず、子どものもっている力を伸ばしていくために活用しなければならない。そのためには、個別の指導計画が、授業につながるものであることが大切である。実態を把握した後、次のように個別の指導計画を活用し、授業に活かすとよいと考える。

- ① 「日々の様子メモ」を活用し、授業や生活場面での困りどどのような場面であればできるのかを探る。
- ② 「話し合いシート」を活用し、次のことを計画する。
  - ・ つけたい力の設定
  - ・ 教科や単元、活動内容の想定と目標の設定
  - ・ よさを活かす支援と集団の中でのつながりを築く支援の計画
- ③ 有効であった支援、継続したい支援を記録する。

### 第2章 支援の必要な子どもにつけたい力

#### 第1節 小学校において重視する二つのつけたい力

小学校においてつけたい力として、次の二つのことを重視したいと考える。

- ・ 自己を肯定的にとらえる力
- ・ よりよい仲間関係を築く力

支援は、子どものありのままの存在を受けとめ、よさを伸ばし、苦手なことには「困らない方法」を教えるようにすることが大切である。

そして、個に応じた配慮や支援によって、子どもが「できた。」という喜びを実感できるようにする。この達成感や成就感を、他者と共有する体験が積み重なることにより、子どもは、認められている自分を見出したり、よりよい仲間関係を築いたりすることができるようになると思える。

#### 第2節 もてる力を引き出す効果的な個別の指導計画の作成

授業における支援を、図1のように分類した。

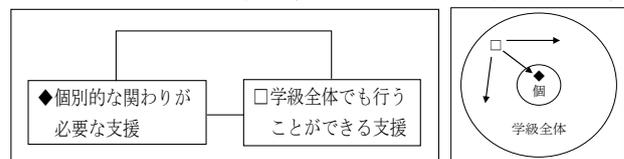


図1 支援の考え方

図2 支援の波及

図2のように、学級全体に行う支援を通して個を大切にする支援を位置づけることにより、学級のほかの子どもたちの理解が深まると考えた。そして、支援の必要な子どものもてる力を引き出すための授業の工夫は、次の二点とした。

- ・ よさを活かすこと
- ・ 友だちとの関わりを大事にすること  
(集団の中でのつながりを築く工夫を入れる)

このような視点で、個別の指導計画を活用し、計画した支援を取り入れた実践を行うことにした。

### 第3章 個別の指導計画を効果的に活用した授業の実例

#### 第1節 友だちと楽しく活動することを大切に した実践例 ー小1A児を通してー

個別の指導計画を活用し、A児の実態と支援が必要と予想される場面について話し合い、支援の計画を立てた。A児は、集中して話を聞くことや友だちとの関わり方に困りが見られた。一方、体を動かすことが好きで、リズムをとったり音読をしたりすることが得意であるというよさがあった。

そこで、A児が、自分のもっているよさを発揮しながら友だちと楽しく学習できるようにすることをめざし、音楽科の「おんがくにあわせてあそぼう」と国語科「こえにだしてよもう」の単元で、実践を行った。

##### 〈よさを活かす工夫〉

A児が自信をもって活動できるように、めあてを明確にとらえられるようにすることと、活動の指示の出し方を工夫することにした。活動する前に、何をするのかイメージできるように、挿絵を提示したり、見本を見せたりするようにした。更に、活動の手順や約束事をわかりやすく示したカードを提示することにより、指示を減らし、活動時間の十分な確保を図るようにした。



図3 体を使って表現する様子

##### 〈友だちとの関わりを大事にする工夫〉

A児が、友だちと楽しく活動することを通して、人とのよりよい関わり方を学ぶことができるように、二人組やグループでリズムを打ったり、声を合わせたりする活動を毎時間取り入れた。友だちと一緒に活動するときの声のかけ方や、態度についていねいに見本を見せるようにした。そして、友だちとの活動の中で、A児の得意なことが活かされる場となるようにした。

#### 第2節 よさを認め合うことを大切に した実践例 ー小3B児、C児を通してー

B児とC児は、同じ学級に在籍している。B児は、相手の様子や気持ちを汲むことや、状況を判断することの困りから、友だちと関わるのが難しい様子が見られた。一方で、物事に一生懸命取り組むよさがあった。C児には、集中を持続させることの困りから、授業中の離席や、指示と違うことをする様子が見られた。一方、素直で体を動かすことが大好きであるというよさがあった。

そこで、学級の子どもたちが、互いのよさを認め合い、その中でB児やC児が自分の力を発揮することをめざし、算数科「水のかさをしらべよう」と体育科「エンドボール」の単元で、実践を行った。

##### 〈よさを活かす工夫〉

B児やC児が、「これならできる。」「やってみよう。」と思うことができるように、具体的な操作活動を大切にすることと導入を工夫することにした。算数科では、単元を通して、一時間の学習を、実測から実測した結果を挿絵に表現し、数字と単位に置き換えるという流れにした。体育科では、導入で「エンドボール」の特性である「パスをすること」や「パスをして走ること」を、具体的に理解できる活動を取り入れた。

##### 〈友だちとの関わりを大事にする工夫〉

B児とC児が、友だちと協力して活動できるように、一人一人の役割を明確にすることや、話し合い活動でめあてを共有することを大切に



図4 グループでバケツに入る水のかさを調べる様子

個別の指導計画を活用したことにより、授業において支援の必要な子どもが、友だちと楽しく関わり合う中で、よさを発揮する姿が見られた。

### 第4章 支援の必要な子どもを育む教育の確実な実践に向けて

#### 第1節 研究の成果と課題

「よさを活かす工夫」をしたことにより、支援の必要な子どもが、授業の中で活躍する場面が多くなり、主体的に学ぶことができた。また、「友だちとの関わりを大事にする工夫」をしたことにより、支援の必要な子どもが、授業の中で学級の子どもたちに認められる機会ができ、友だちとよりよく関わる方法を実践で確かめることができた。

支援の必要な子どもが力を発揮できるようにするためには、指導者が子どもの実態を適切に把握し、指導・支援の計画のもとに指導することが欠かせない。

#### 第2節 今後の取組に向けて

支援の必要な子どもが集団の中でのつながりを築くことができるようにすることは、学級の子どもたちが互いを理解することにつながる。このことを踏まえて個別の指導計画を作成することが大切であるとする。そして、指導・支援を「共通理解、継続、共有」することにより、開かれた学校支援体制をつくることが重要である。